

## 最優秀賞

テーマ：未来のための今を生きる  
「ありのままの自分で」

東京都・桜美林高等学校1年 山本彩佳

「車椅子に乗るのは、恥ずかしい」

4年前、中学入学と同時に車椅子に乗ることになった。

私は生まれつき、筋肉が他の人よりも少ない難病で、体が大きくなるにつれて走ることができなくなった。階段の上り下り、長距離を歩くことができなくなった。小学校低学年までは皆と同じように生活できていたが、高学年になり徐々に転びやすくなってきた。一度転んでしまうと、自分で立ち上がることができない。周りの勧めもあつて、4年生からは杖を持って登校するようになった。周りからはジロジロと見られるその視線が、とても嫌だった。

入学した中学は、エレベーターはあつたが校舎が広く、歩いていくのが大変な場所もあつた。そのため、移動教室の時は車椅子に乗ることにした。車椅子を使うことについては、正直、大きな葛藤があつた。小学校の時の杖ですら周りからの視線が恥ずかしかったから、車椅子に乗ることですらいろいろな目で見られると思つたからだ。

しかし、いざ生活してみると、私の予想とは違つた。周りの子は思つたより、すんなりと車椅子に乗つた私を受け入れてくれたのだ。「車椅子を押そうか?」と言つて、押してくれた子。雨の日に濡れないように傘をさしてくれた子。「車椅子をこぐ姿、かっこいい」と言ってくれた子。不思議なことに、学校内では周りからジロジロと見られることもなかった。ありのままの自分を受け入れてくれたということがとてもうれしかった。

校舎内には緩やかではあるが、手でこぐのが難しい傾斜もある。その場所で私はいつも苦戦する。うまく上れたと思つても、油断すると滑り落ちてしまう。その場所で苦労していると、「押すよ」と、すつ

と後ろから押して手伝ってくれる子がいる。私は「ありがと」とひと言しか言えなかつたけれど、胸が熱くなるほどのうれしい経験が何度もあつた。「押すのは楽しいから、またいつでも言つて」と知らない先輩や同級生が声をかけてくれて、その度に私の交友関係も広がつた。

高校1年生になり、新たに外部受験で1年生が入学してきた。その子たちも、私の車椅子を受け入れ、手伝ってくれる。ある日のこと、私が傾斜でこぎつてっていると、後ろで「あつ、車椅子の子」という声がした。そして、すぐに車椅子が軽くなった。「押すよ。あつ、さっきの言い方嫌だよね?」と言われてふと気がついた。「車椅子の子」と言われて、嫌な気持ちにならない自分がいた。4年前の私にとって、車椅子に乗るということは、一つの大きな壁だった。しかし、周りの友人のお陰で、私はその壁を乗り越えることができたのだ。車椅子も私の一部だと思えるようになっていた。みんなが私の価値観を変えてくれたのだ。

車椅子に乗って最初に驚いたことは、見える景色が変わつたことだった。視線が低くなったことで、今まで気づかなかつたものに、気づくようになった。何気なく通つていた場所に、段差や傾斜があり、そこは私にとっては大変な場所に変わった。車椅子に座つてみると、人が大きく見え、周りの人との距離が広がつたような気になった。周りと違つ自分。孤独を感じ、閉鎖的な気持ちになつた。しかし、私の思いに反して、車椅子に乗つたことで、人の心の優しさに触れることができた。

病気を考えると、これから先もいろいろな困難が待ち受けていると思う。それでも逃げずに、その現実を受け入れたい。現実を受け入れ、生きていく中で、新しい価値観に出会え、人生がもっと豊かに変わると信じているからだ。そして、私がこれまで受けてきた数々の好意や励ましに、少しでも報いるために、社会の中で私ができることを見つけていきたい。